

当院における病棟リハビリテーションの現状 ～特に看護師の関わりを中心に～

幸町記念病院

○車 圭子、戸川 満喜、玉井るみ子、大野呂和栄、小井 正美、
佐藤真由美、秦 佳子、岡 良成、高津 成子、宮崎 雅史

【はじめに】当院ではH19年から独自のリハビリメニューを作成し、毎日の看護業務の一環としてリハビリテーションに取り組み外来透析への復帰を可能にしているその現状を報告する。

【対象】H22年の入院透析患者278人のうちリハビリを目的として入院した患者28名

【内容】車椅子移乗から独歩まで、症例に応じてリハビリの目標を設定し、日常生活動作を中心に毎日リハビリを行った。また退院後の物理的・社会的環境の調整に努めた。さらに認知症のない患者14名を対象に意識調査を行った。

【結果および考察】入院患者の9割はリハビリ目標を達成し通院透析に復帰した。このうち8名は環境調整を必要とした。これは個々の患者に即したリハ目標を設定し毎日の入院生活そのものをリハビリとして実践したことが有効であったと考えられる。加えて退院後の環境の調整も通院維持には欠かせなかった。また患者を取り巻く環境も含めて、全体像を理解した看護師が日常生活動作の中でリハビリをするため患者の不安の解消に有効であった。

【まとめ】看護師は患者の日常生活の困難を少しずつ克服しながらリハビリの目標達成に向けた援助ができるため、今後も継続して取り組みたい。